

外国語科、外国語活動を中心とした提言（若手 保彦 先生）

はじめに

令和7年度は、教科指導員として小学校2校、中学校2校の計4校を訪問し、視察する機会をいただいた。例年と同様に、私の話は「提言」と呼べるほど大それたものではないが、せっかくの機会であるため、訪問を通じて感じたことや今後の取り組みの方向性について、英語教育の立場から述べさせていただく。

学校訪問全体に関する感想

こちらも例年と同じであるが、訪問したどの学校でも、廊下ですれ違う児童・生徒が元気に挨拶をしてくれる。これは、先生方の日々の粘り強い指導の成果であると感じる。

最初に行われた学校経営説明の時間では、各学校が、学校や地域に受け継がれてきた伝統と、これからの時代に求められていることの双方を意識し、バランスの取れた取り組みを進めていること、また、先生方が互いに協力しながらチームとして学校を前へ動かしていこうとする姿勢を強く感じた。

続く一般授業参観では、それぞれの授業で、扱うテーマへの児童・生徒の興味・関心を高めようとする先生方の工夫が見られた。特に、ICT 機器や実物教材を活用し、児童・生徒が納得感をもって理解できるように工夫している場面が印象に残った。教室に掲示された様々な掲示物からも、学習への意識を少しでも高めようとする先生方の熱意が感じられた。

特定授業のうち、特に外国語及び外国語活動の授業に関する感想

今回参観した授業では、どのクラスの児童・生徒も楽しそうに言語活動に取り組んでおり、普段から活発にインタラクションを行っている様子が窺えた。特に今年度は、「友達のことをよく知るために、できることを伝え合おう」という目標に「友達理解王に俺はなる」という副題を加えて麦わら帽子を持参したり、「自分の“推し (fave)” をみんなに紹介し、好きになってもらおう」といったように、Today's Goal の言葉の選択が生徒の心に「刺さる」ものとなっていた。

また、メインの言語活動に入る前に、チャレンジした場合にプラスの点数を与えることを伝えたり、モデルとなるスピーチの良い点を確認してスピーチのポイントを明確にするなど、生徒の意識を高める工夫も見られた。さらに、活動に取り組む前に「何が心配?」「不安なことは?」と問いかけて準備を促したり、勉強が苦手と思われる生徒へ個別にサポートするなど、教師による丁寧な配慮も印象的であった。

今回参観した授業は全て ALT とのチーム・ティーチングであったが、ALT はモデルとしての役割だけでなく、活動内容の説明、生徒へのサポート、プレゼンテーションに対するコメントなど、多くの場面で活躍していた。また、ALT が児童と発音練習を行っている間に、日本人の外国語担当教員が板書を行うといった役割分担ができていた場面もあり、多忙な中でも事前の打ち合わせが十分に行われていることが窺えた。

今年訪問させていただいた小学校の外国語及び外国語活動の授業では、様々な表現を使わせるためにカテゴリーごとに色分けしたシートを用いたり、「作戦タイム」を設けてグループ内の役割分担について児童同士で話し合わせたり、ALT や日本人外国語担当教員に語句の発音を確認させたりする

等の工夫が印象的であった。

一方、今後の課題として、会話の自然さに関わる点が挙げられる。参観した授業の一つでは、以下のようなやり取りが見られた。

A: Hello.

B: Hello.

A: Can you swim fast?

B: Yes, I can. I can swim fast.

Can you play the piano?

A: No, I can't. I can't play the piano.

このやり取りは、「お互いのことをよく知る」というコミュニケーションの目的を達成するために、相手のできることをたずねたり、自分のできることを伝えるものであるが、相手の答えに対する反応がない点で、「相手への配慮」に欠けている印象を受けた。

この問題に対する対応としては、例えば B が “I can swim fast.” と答えたことに對し、A は “Great!”、“Wow! That's cool!” のような反応ができることが望ましい。同様に、A の “I can't play the piano.” の後で、B は “Oh, I see.” のように反応できるとよいであろう。

さらに言えば、もし B が反応に困っていたら、A はできないことを伝えた後で “But I can play the recorder well.” のように、自分が演奏できる楽器について伝えたり、“How about you?” のように聞き返すことで、会話を発展させることができる。当面の目標としては以下のようなやり取りを目指したい。

A: Hello.

B: Hello.

A: Can you swim fast?

B: Yes, I can. I can swim fast.

A: Great!

B: My turn. Can you play the piano?

A: No, I can't. I can't play the piano. But I can play the recorder well.

B: Oh, nice. I can play the recorder a little.

中学校の授業では、現在進行形の表現を練習する際に、まず男性が走っているイラストを提示して “He is running.” と言わせ、その後に男性の後ろに熊のイラストを追加して “He is running from a bear.” のような表現を引き出していった。このように、生徒の記憶に残りやすく、かつ **grading** を意識した指導方法が印象的であった。また、練習の手順を説明した後に所要時間を生徒の意見を取り入れて設定したり、教師が一方的に指示するのではなく問いかけを通して生徒に考えさせることで、重要なポイントに気付かせる工夫も素晴らしかった。

今後の課題としては、プレゼンテーションの際に重視するポイントの意識づけが挙げられる。授業では「アイコンタクト」「ビッグボイス」「内容」などが示されていたが、それぞれがなぜコミュニケーションにおいて重要なのかを、もう一步踏み込んで生徒に理解させたい。例えば「アイコンタクト」は、単に相手を見ることではなく、相手が理解しているかどうかを確かめるための行為である。理解が不十分な様子であれば、ゆっくり話したりキーワードを繰り返すなどの工夫が必要になる。同様に「ビッグボイス」も、むやみに大きな声を出すのではなく、相手との距離を踏まえた“聞き取りやすい声量”を調整することが重要である。これは相手の様子を見ながらでなければ判断ができ

ない。「内容」については、基本的な情報が優先されているか、分かりやすい順序になっているか、他の友達にもシェアしたくなる情報を含んでいるか等、具体的に示すことで、生徒が自分のプレゼンテーションをどのように改善すればよいか考えるきっかけになると感じた。今後の取り組みに期待したい。